令和六年十二月一日発行　毎月一回一日発行

書道研究誌

書の光

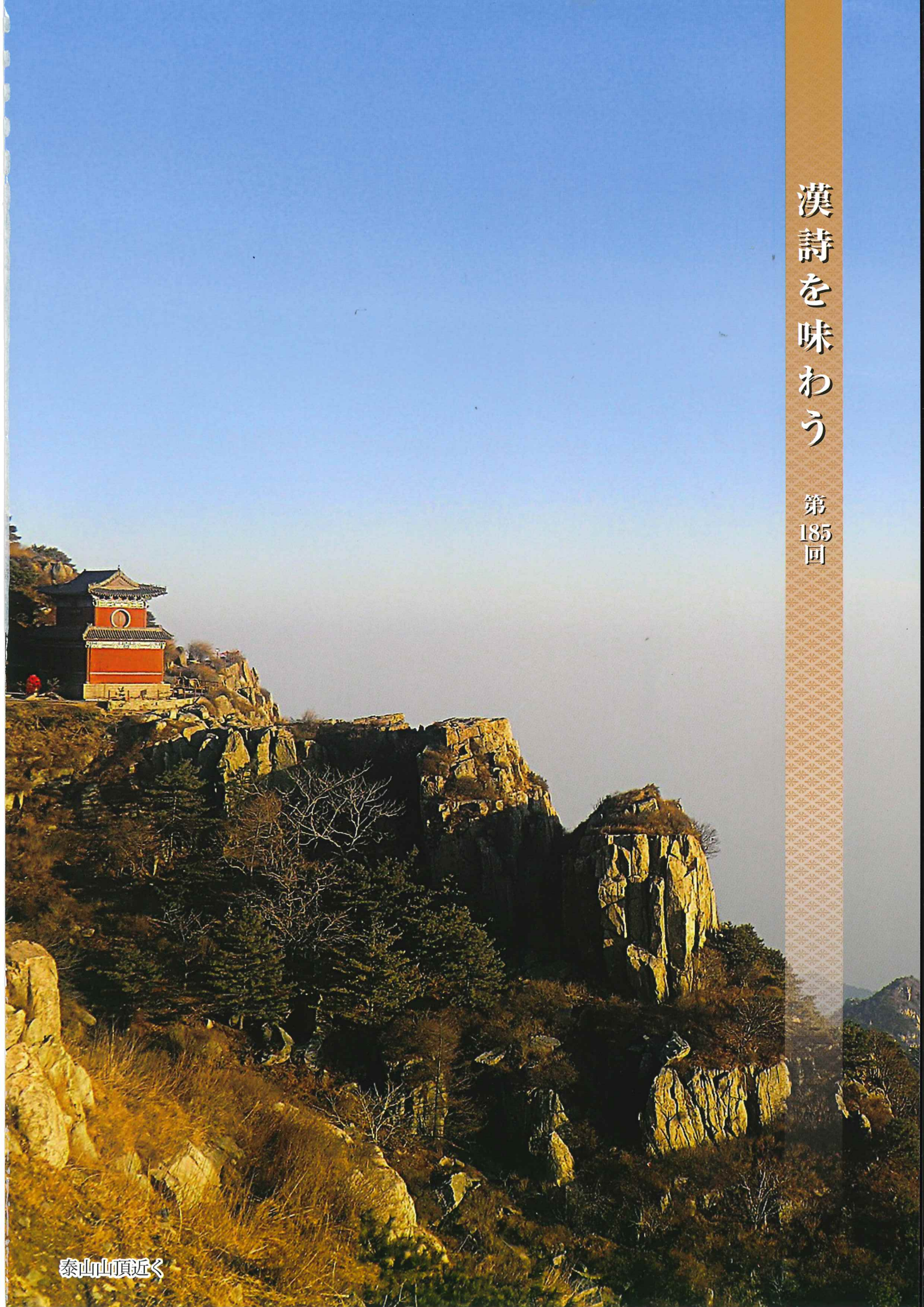
12
2024

Vol.676

宮城野書道会

漢詩を味わう

第185回



泰山山頂近く

讀繹山碑　張継

六國平來四海家　六国　平らぎ来りて　四海家なり
相君當代壇才華　相君　当代　才華を壇にす
誰知頌徳山頭石　誰か知らん　徳を頌せる山頭の石
却與他人戒後車　却って他人の与に　後車を戒むを

六国が平定されて四海が一家となり
丞相李斯は当時、華やかな才能を存分に発揮した。
誰が予想しよう、山頂の頌徳碑が、
却って他人に対して後車の戒めとなったことを。

《繹　山》　山東省兗州の趨繹山。繹と嶧は同じ。
《六　国》　戦国時代の燕・趙・韓・魏・斉・楚の六国。すべて秦に滅ぼされた。
《四海家》　四海は海内。家は一家となること。
《相　君》　宰相。秦の丞相李斯のこと。
《才　華》　華やかな才能。
《戒後車》　前者の失敗を見て戒めとすること。

紀元前二三〇年から前二二一年の十年間にかけて、戦国時代の六国は、秦によって倒されて、秦は中国最初の統一国家となりました。始皇帝（在位前二四七～前二一〇）は、古代君主の理想な統治をした伝説上の八人、三皇と五帝の皇と帝をとり「皇帝」という称号を編み出して即位し、専制政治を採用して、中央集権国家を築きます。始皇帝はまず片腕として活躍している丞相李斯の力を借り、文字の統一を図り、命令や規則が行き渡るようにしました。

始皇帝は、天下統一のあとに大がかりな巡視の旅にでて、権力者としての威厳を誇示しました。司馬遷の『史記』によれば、山東省の趨繹山、名山で知られる泰山、おなじ山東省の琅邪台へ行き、続いて之罘から、河北省の碣石、浙江省紹興の会稽山を巡幸しました。巡幸の先々では盛大な祭典を行い、天下を統一した自分の徳と功績をたたえて後世まで残すために碑を建てます。之罘では之罘山と東観山の二か所に建てたので七つの刻石です。

その全ての字は丞相李斯の書と伝えられます。始皇帝は度量衡、貨幣の統一、文字の統一や焚書坑儒などの政策を実施しましたが、これらは李斯の進言によるものと言われ、李斯は政治能力に長けていたばかりでなく、公用の文字とされた小篆を作った人物です。詩中では李斯のはなやかな才能を、「才華」と詠んでいます。

始皇帝の頌徳碑は早くから失われて、現存するものは泰山刻石の断片十字と、北京歴史博物館にある琅邪台刻石の一部だけですが、小篆の代表的な作品として有名です。

詩の最後にある「戒後車」とは、『漢書』にみえる「前者覆らば、後車誡む」の語にもとづきます。始皇帝の頌徳碑が、皮肉にも始皇帝のあまりの圧政によって、死後に忽ち国の滅亡を招いたことを戒めるものになったことを述べています。

作者の張継は中唐初期の詩人で、蘇州寒山寺を詠んだ「楓橋夜泊」で有名です。

繹山碑をはじめとして、始皇帝の立てた碑については後世多くの詩人によって詠まれています。

参考文献：「書林と詩苑」福本雅一著（同朋舎）・中国の歴史（講談社文庫）

旅館 誰か問わん　寒灯 独り親しむ可し　一年 将に尽きんとする夜　万里 未だ帰らざる人　寥落として 前事を悲しみ　支離として 此の身を笑う
愁顔と衰鬢と　明日　又た春に逢う

《大意》旅の宿り、話しかけてくる人もなく、身近にあるのはただ冷たい灯だけ。一年がいまや終わろうとするこの夜、はるかに彷徨って帰れないでいる人。おちぶれはてて、往にし日を振り返っては悲しみ、ちぐはぐになってしまったこの身の上をあざ笑う。愁いに満ちた顔、衰えた髪の毛、みるかげもないこの私なのに、明日は又も新しい春を迎えるのだ。（戴叔倫詩・除夜石頭の駅に宿る）

物を容るるは美徳なり　然れども亦明暗あり

《大意》人の忠告を受け入れることは美徳であるが、しかし明暗がわかれるのでこれに従うにはよく判断しなければならない。（言志録）

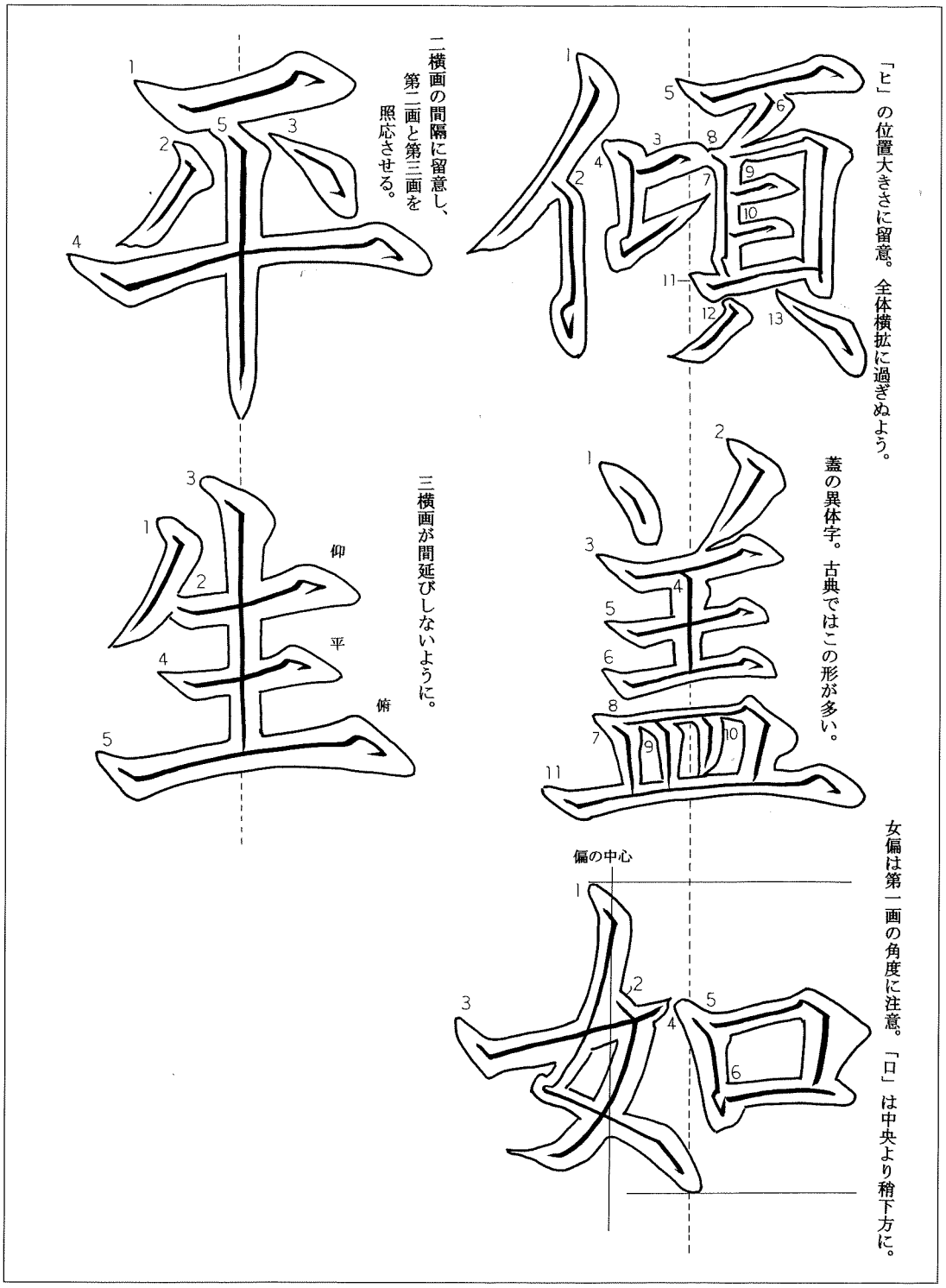
傾蓋如平生

読み　蓋（がい）を傾くること　平生の如し（車を近づけておおいを傾け普通に話す旧友のようだ）

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。



連月課題

蘇軾詩

「呂行甫司門の河陽に倅となるを送る」（前半）

結交不在久　交を結ぶこと　久しきに在ざるも

傾蓋如平生　蓋を傾くること　平生の如し

識子今幾日　子を識りて　今幾日ぞ

送別亦有情　別れ送りて　亦た情有り

子生公相家　子は公相の家に生まれ

高義久崢嶸　高義　久く崢嶸たり

天才既超詣　天才　既に超詣

世故亦屢更　世故も亦た屢しば更たり

譬如追風驥　譬えば風を追う驥の如し

豈免羈與纓　豈に羈と纓を免れんや

行書

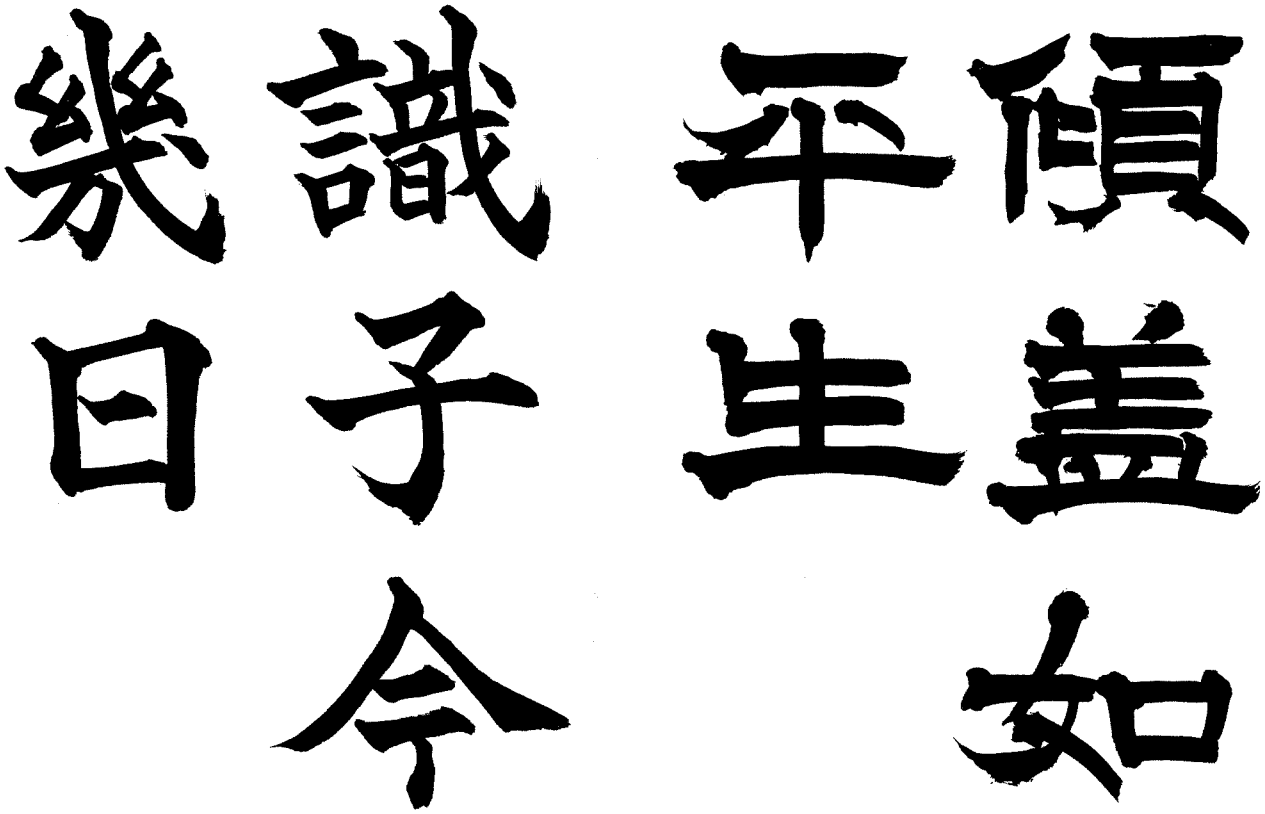
※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

草書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隷書



子を識りて　今　幾日ぞ

ペン字部課題　（12月26日〆切）

細字部課題　（12月26日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲　書

音　テンチゲンコウ　ウチュウコウコウ

略解　天はくろく、地は黄色である。宇宙ははてしなく広い。

支部	順位	氏名

水鳥を水のうへとやよそに見む
我も浮きたる世を過ぐしつつ

紫式部

和泉溪石先生書

質文殊致

■虞世南（ぐせいなん）・孔子廟堂碑（こうしびょうどうひ）（初唐・西暦六二九年頃）の臨書 (6)

質文致すところを殊（こと）にし

象雲臨

『質文殊致』

中国の歴代の書人は、その大半が政治家や官吏を務めていた人物です。虞世南を始めとする初唐の書人は太宗に官僚として仕え補佐した政治的にも有能な人物です。初唐の三大家、本碑の虞世南や欧陽詢、そして褚遂良の名品は皇帝の命によって書かれた作品が多く、書法的にも当時最高の書と言っていいでしょう。

幾度も述べているように、初唐の楷書群は、書法的に完成された極則とも言われるものですが、現代書道では創作作品が重んじられ、初唐楷書に倣った作品は評価されにくい一因にもなっています。これはその時代の作品が悪いわけではなく、芸術自体が時代相を反映するものであるべきものだからです。楷書という書体の基本的書法を備えているものですので、積極的に習うべき古典に変わりありません。

さて、今月の四文字は、唐が建国される前までは三皇五帝といわれる聖人の手によって殷や周など様々な国があったが、「質（実質的内容）と文（外面的形式）とは目指すところを異にしていた。」という内容です。

孔子廟堂碑は、儒教思想を宣揚し、学問を振興するために建立されたものですが、碑文内容は難解です。

文鄙理疎

文は鄙にして理疎く……

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書　(62)

象雲臨

『文鄙理疎』

今回は前回の「羲之の子敬に与う」からの文脈で、王羲之が子敬（王献之）に与えた『筆勢論』という書論は、文章がいやしく、論理は雑で、意味も通じず表現も拙いもので、王羲之の作ではない。と述べている中の一節です。

清末の劉熙載は書譜について「用筆、破れて愈々完、紛れて愈々治まる」（書概）と評しています。「用筆破れて愈々完」とは用筆が変化極まりないが完全で、「紛れて愈々治まる」は、動的で情熱的に咲きみだれているが、書法は崩れることなく正確であることを言っています。

一方で真逆な評価もあります。唐時代の竇臮は『述書賦』のなかで「凡草にして閭閻の風、千紙一類、一字萬同（野暮で田舎臭く、すべて同じ類で、一字はみな同じに書いている）」と酷評しています。しかし書譜に登場する今回と同字の例を掲載しましたが、少しずつ形が異なっていて、一字萬同という語は当たらないことが判ります。